

成人したその日に神父様から求婚されました

「私を育てたのは妻にするため。神前初夜で妻になりました」

「ルシアン！　ただいま。……見て！　ユーガたちと山に行ったら、群生地を見つけてね、きのこがこんなに取れたのよ！」

わたしは背負っていた長筒状の籠をおろして、片田舎の寂れた村でも、神聖なる教会の扉を開け放つ。

目的の人物を探すために、辺りを見回すと、正面を向いたところ、彼は立っていた。

色とりどりのガラス片を繋ぎ合わせたステンドグラスは、夕焼けで真っ赤に染まった空の光を差し込み、幻想的で落ち着いた淡い光で室内を照らし、祭壇の中央に降り注いでいた。

中央には、美しい金髪を腰まで伸ばした美しい青年が、祭壇上部にある神を象った銅像に向けて、聖書を片手に祈りの言葉を捧げている。

まっすぐその人の隣に行こうとするけれど、教会の入り口を跨ぐ前に気づく。

自分の身体が泥だらけだということに。

入口で靴の泥を落とし、頬や手についた泥を服の袖や裾で拭ってから教会に入ると、青年——ルシアンは澄み切った青い瞳を細め、柔らかな笑みを浮かべて迎える。

「お帰り、リリム」

聖書を閉じて、祭壇に置くと、汚れが目立たぬ黒の神父服を翻し、首から大きな銀の十字架を揺らしながら、こちらに歩いてくる。

わたしの前に立ち止まると、頬に手を当てて、拭き切れていない泥を指で拭う。

「泥がついているよ」

ざらりとした温かい指が、頬を撫でる感覚か、それとも、村一番の美人であるルシアンが触れてくれていると意識しているからか。きのこ取りで疲れている身体が、急激に血が熱くなる。

熱くなる頬の感覚。

バレたらきつと揶揄われてしまう。咄嗟に、頬に添えられたルシアンの手を払う。

「もう、ルシアンったら。いつてくれたら、自分で取るのに」

「良いよ。私がしたいんだから。——それよりも、リリム。また、約束を、破ったの？」

「——あ」

——ルシアンと約束をしていた。

外に出てもいい。友達に会いにいつでもいい。

けれど、危険な場所に勝手に入らないというのは、彼と守らなければいけない約束のひとつだった。

でも、今日の朝、ユーガたちが仲間を連れて、美味しいきのこが取れる場所があると教えてくれた。

誘惑に負け、約束を忘れてしまっていたのだ。

ルシアンが顔色が段々悪くなっていく。

「きのこの群生地って、森の奥の方だね？　危険なところに入らないって約束、忘れちゃった？」

「ごめんなさい……。ユーガたちと一緒にだから、大丈夫だっ
て思ってた……」

——知っている。

ルシアンは、なにをしても怒らない。叱る時はあるけれど、感情的になるのではなく、理で諭していくタイプだ。

そういう性格だからこそ、無意識のうちにルシアンに甘えてしまう。

こういう時に、約束を忘れて、感情を優先してしまう自分に、いつも罪悪感を持ってしまうのだ。

しゅんと肩を落とすと、ルシアンの表情から暗い感情が抜けていく。

俯いて、唇を嚙んで泣き出したいのを我慢していると、ルシ

アンは優しく抱きしめた。

「森には、危険な獣が多いんだ。それに、私以外の男を、信用しては駄目だと、口酸っぱく言ったよね？」

「でも、ユーガは知らない男の人じゃないよ……？」

「村長の息子だって身元が保証されても、本性はわからない。君に酷いことをするかもしれない。約束が守れないくらい、私のこと、嫌いなのかな？」

——ルシアンが嫌いなんて、そんなことがあるわけがないに、自分に非がある言い方をするのはずるい。

でも、先にずるいことをしてしまったのは、私だから。

許して欲しくて、腰をぎゅっと抱きしめた。

「ごめんなさい。次は、森の入り口までにするから……、嫌わないで」

「……………」

言葉の代わりに、背中の手が回る。

表情が明るくなって、軽く笑い声を漏らして肩を竦めた。

「嫌うわけないよ。……でも、私が意地悪で言っているわけではないのは、理解してほしい。本当に、危ないから。君になにかあったら悲しいから、私の目が届く範囲にいてくれとお願いしているんだ。言っていることは、わかるね？」

「……わかった。もう、しないよ」

次は同じ過ちを繰り返さない。強く頷くと、ルシアンが纏う雰囲気は少し和らいだような気がした。

「リリムになにかあったら、周りの人にも迷惑がかかるんだよ。ユーガたちにも、迷惑をかけては駄目だ」

「はい、ごめんなさい」

何度か、わたしの頭を撫でながら、顔を上げるように言われたので、顔を上げると、ルシアンの澄んだ、清らかな青い瞳と
かち合う。

本当に、ルシアンは綺麗な顔立ちだなと感嘆を漏らすと、切

れ長の瞳が弧を描く。

「わかったなら、いいよ。……じゃあ、仲直りのキス、しよつか」

「ん……♡」

頭上から降りてくる唇。

薄く唇を開けると、ルシアンのもるついた舌が隙間から入り込んで、舌にたっぷり唾液を塗り付ける。

「はッ……♡、ン♡♡、ちゅッ♡、ちゅッ♡♡」

帰って水分が欲しくてカラカラだった喉が、潤っていく。

上あごの溝や、舌の裏まで。ルシアンのざらざらとした舌が

なぞると、背筋にぞわぞわとした痺れが走る。

「ンッ、フッ……♡♡」

背筋を這い上がる痺れから逃げたくて、反射的に胸板を押すと、ルシアンは端正な顔を少しだけ顰めて、渋々と唇を離す。

銀色の細い糸が引いて、一定距離でぷつんと切れると、口の周りについた唾液を余すことなく、舌で舐めとる。

ルシアンは、きつとわたしが拒否をしていると思ったのだらう。

いつもの柔らかい表情に、硬さが宿る。

きつと、約束を破ったことを気にしていて、反抗的な態度を

見せてしまったから不安なのかもしれない。

——どうしよう。

どうしたら、ルシアンが直るのだろう。

ルシアンは、わたしの中の不安など見透かしたように、小首を傾げた。

美人はなにをしても美人なのだと、ときめいてしまう。

「嫌、だった？」

少しだけ、震えた声でルシアンの親指が濡れた下唇に添える。

下唇を剥いて露わになった歯列をひとつずつ、なぞる。

問い詰めるのではなく、何故拒否してしまったのか、その理由を確かめるような仕草。

ルシアンに嫌われるのではないかという不安だった心が溶けていく。

「ぞわってするのが、耐えられなくて、……嫌なわけじゃない」

ルシアンの口角が上がる。

意地悪に、いつもしている行為を言語化していく。

そうすることで、わたしの心が揺れると理解しているからだ。

「毎朝、神様の前でしているじゃない。愛を確かめ合う行為のときだって、キスをする。これから、本当の結婚式を挙げる時もあるだろうし、その時だって。……その度に逃げようとするのなら、私、泣いちゃうな？」

ルシアンの瞳がじっと見つめる。

「でも、まだ、慣れない」

「まだ、私だけの女の子になって、日にち、経ってないものね？」

目を閉じて、ルシアンと始まった歪な関係について思い出す。

——ルシアンは、わたしにとって養父であり、兄のような存在である。

数年前、まだわたしが幼かった頃。

王都で暮らしていた時に起こった内乱に巻き込まれたせいで、両親を失い、路頭に迷っていたところをたまたま王都の教会に来ていたルシアンが保護をしてくれた。

瓦礫の山の前に立ち尽くして茫然としている私の手を引いた。

身寄りもないと知ると、ルシアンは「私のことをこれから家族と思うと良い」と。

衣食住を与えてくれて、家族の暖かさを教えてくれた。

——恩人でもあり、憧れの人。

内乱にこれ以上巻き込まれないために、ルシアンは王都を離れ、争いとは無縁の、自然あふれるこの村の教会に越してきた。

ルシアンはその村で神父をしていて、わたしはそのお手伝いで教会のお掃除をしたり、お手伝いをして、今日までを共に過ごしている。

一緒にごはんを食べて、お祈りをして、時々村の仕事を手伝って。一緒にお風呂に入って、お喋りをして、一緒にベッドで

眠ってくれる。

全て、一人の私が寂しくないようにと、周囲に過保護だと呆れられるくらいには、優しくしてくれる。

——ある、一点を除けば、慎ましやかな暮らしを享受する、普通の家族と、言えるのに。

その日は突然やってきた。

「リリム、おめでとう。今日で、君も立派な大人の女性だね」

ティーカップを手前において、テーブルを挟んだ先にいるルシアンが微笑む。

「ありがとう。あの日、ルシアンが助けてくれなかったら、きつと今日まで、生きてこれなかったと思う」

戦争に巻き込まれて、家族を失って途方に暮れていた頃を思い出す。

わたしの目の前で罪のない民間人も、子供たちも死んでいった。

わたしも、ここで死んでしまうか、孤独に生きていくのかわからなくなった時だった。

ルシアンと出会い、気の毒に思ったのか、一緒に暮らすようになったのだ。

「リリム」

あの壮絶な光景をルシアンも思い出したのだろうか。彼は息を呑む。

「あの時のことはもう、思い出さなくていい。辛い記憶は、消し去ってしまいなさい」

神妙な面持ちで、ルシアンはティーカップに口をつける。

わたしも、飲みたいけれど、なかなか口をつける気にはなれなくて紅茶の表面に映る自分の顔をなんとなく見つめる。

思い出さなくてもいいと、ルシアンは言うけれど、あの日はわたしの人生が終わった日で、始まった日でもある。

ルシアンと、家族になれた特別な日で。

「忘れたくても、忘れられないよ」

だから、そう簡単に忘れられない。

力のない笑いが漏れる。

ルシアンは、そうか、とだけ言っ、肩を落とす。

「……ところで、リリムは、良い人は、見つけたのかな？」

「んえッ？」

話を戻そうとすると、ルシアンからの唐突な質問に変な声が出してしまう。

この村では成人になると将来の伴侶を見つけて、結婚をして

いく慣例となる。

わたしもその慣例に習えば、結婚相手を見つけなければいけないし、いずれ、ルシアンの中から離れてしまわなければならぬだろう。

いつまでも、ルシアンに迷惑はかけていけない。

「そろそろ、探さなきゃ、だよね……？」

ルシアンが眉がぴくりと動く。

やっぱり、いつまでも親元でのんびりと暮らしてはいられない。
い。

これ以上、ルシアンに迷惑を掛けられないし、ルシアンだっ

て、さっさとわたしを嫁ぎ先に行かせて、他の女性と幸せになるなり、した方が幸せだろう。

良い人なんて、いないけれど、私の中であった候補を挙げ
る。

「ユーガとか、ローソとか、かな？ リュークは恋人がいる
みたいだし……」

もしかしたら恋人がいたりして、結婚しようなんていったら
振られる確率の方が高いけれど。

それでも、挙げないよりは安心してもらえると思って口にし
た。

——なのに。

何故かルシアン表情は暗くなっていく一方だった。

男の人の名前が挙がるごとに、貼っていた笑みが消えていく。

「ルシアン？」

「……駄目だよ？」

ルシアンは椅子を倒す勢いで立ち上がると、私の腕を強引に掴んだ。

「ルシアン、痛いよ……」

テーブルが揺れて、冷めていた紅茶が零れる。

ルシアンの方に置いていたティーカップは運悪くテーブルから落ちて、高い音を立てて割れた。

「駄目。駄目。ぜったい、駄目。……お嫁になんて、いかせない」

重たく伏目がちに、目つきを悪くしたルシアンが無言で腕を引いて、寝室に導く。

ルシアンが、こんなに怒るなんて初めてだ。

ルシアンは、基本的には怒らない。

ルシアンに構ってほしくて、カップを故意に割った時だって。意地悪で聖書を隠した時だって。口喧嘩をした時だって。

ルシアンは「そんなことをしたら駄目だよ」と優しく諭すだけで、感情を露わにすることがなかった。だから、私も、安心して、ルシアンに甘えられた。内にため込むから、困らせないようにと意識するようになった。まだまだ、感情的になってしまった時はあるけれど、最近では、ルシアンを困らせる回数も減っていった。

だから、怒る理由がわからなくて、私は首を傾げるばかりで。

そうしているうちに、ベッドの縁に立たされて、背を押される。

ベッドの上に倒れると、男性一人分の重さが腹の上に乗っかる。

「ここまで育つの。ずっと、待っていたのに。他の男に取られるなんて、我慢できない」

ルシアンは、一人ごとをぶつぶつと呟く。

親指の爪をカリカリと噛んで、額には脂汗が滲んでいる。

こんなルシアンを見たことがなくて、まるで知らない男性と相対しているようだった。

怖くて、心臓がバクバクする。

「ねえ、……ルシアン？」

「ああ、そっか。……そうだったね」

ルシアンに呼び掛けると同時に、彼が大きく頷く。

彼の中で、なにか大きな決断をした合図だったのだろう。

腹の上に押し付ける硬い物が、ゴリッ♡と、強く押し付けられる。

「リリム。リリムは、お嫁に行く必要はないんだよ」

「どうい——、ンむッ♡♡」

顎を掴まれて、ルシアンに無理矢理唇を奪われる。

初めての、キスだった。

村の、同世代の女の子たちは、初めてのキスをする表現を、

幸せがいっぱいになる味だとか、恥ずかしくて心地よい、なんて表現をしていたけれど。

これは、明らかに違う。

口の中で、虫が這っているようなぞわぞわ感と、知らない男性に蹂躪される支配感。

幸せより、怖いが勝る。

「むッ……、ぶッ♡♡」

喉奥にまで伸ばされた舌尖に、反射的に嗚咽が走る。

そこで、ルシアンに理性が戻った。

しまった、と言う表情で顔が離れ、大きく肩を上下させてこ

ちらを見下ろす。

罪悪感で滲んだ色を見せたせいで、こちらにも怒るに怒れない。

ルシアンは、神父服の袖で口についた涎を拭ってくれる。

「ごめん、苦しかったよね？」

「大丈夫……、けど」

理性を失ったみたいに襲われるのは怖かった。

言葉を飲み込む。

きつと、本当のことを言ってしまったら、ルシアンは傷ついてしまう。

それだけは嫌だった。

ルシアンは私を助けてくれて、家族になってくれて、一緒に過ごしてくれた、大切な人なのに。

一時の感情だけで、彼の気持ちを傷つける気にはなれなかったから。

ルシアンは、しばらく呼吸を整えて、前髪を掻き上げる。

冷静さを取り戻しつつはあるけれど、瞳の奥にある狂気は失せない。

「リリムは、私の妻になる運命なのだから、他の男の元には、嫁がせない」

確かな決意を持って、ルシ안의指が服のボタンにかかる。ぷちり、ぷちり、ひとつずつ丁寧に開けていくボタンの音が、静寂の寝室に響く。

これから始まる行為がわからないほど、私も無知ではないつもりだ。

村の奥にある森の入り口は、村のちょっとしたデートスポットで、そういう行為をしているカップルと何度か遭遇したこともある。

服を剥かれ、裸になるという行為が。

お風呂に入るわけでもないのに、裸になることが恥ずかし

い。

父のようであり、兄のようであるルシアンとだなんて、想像ができない。

最後の抵抗で、最後のボタンを外そうとするルシアンの手
に、手を添える。

「わたし、ルシアンと大分、年が離れてるよ……？」

わたしがルシアンと初めて会った時、既に年齢は二十歳を超えて
えているはずだ。

そしてそこから年数を計算して。わたしが今年で十八歳。な
ら、ルシアンは、二十代後半か、三十代か。少なくとも、親子

ほど年が離れているといっても過言ではない。

前に、年齢を聞いたことがあるけれど、うまくはぐらかされてしまったから、本当の年齢はわからないけれど。少なくとも、一般的な婚期は過ぎている年齢だと、思っている。

もう、何年も経っているのに、ルシアンを見た目は一向に年を取る気配がない。年齢のことを意識しないと、つい年の近い兄のように接してしまう。

——とにかく、親子ほど年が離れているルシアンと結婚なんて。

貴族では、年の差は珍しくないらしいし、生殖機能さえあれ

ば男性は結婚に年齢は関係ないけれど、平民同士の結婚は若くない年齢での結婚や、年の差での結婚は珍しい。

それに、ルシアンは人並み外れた美貌と、人望がある。なんでもそつなくこなせるし、魔法だって扱える。

対して、わたしにはそれがない。全てにおいて平凡で、取柄がない。

年の差にしても、持っているものを比べても、わたしたちは釣り合っていない。

そして、もっと重要なことがある。

結婚なんてしたら、隣にいつもいたルシアンとの関係性が変

わってしまいそうで、怖い。

でも、ルシアンはわたしが気にしていることを、まったく気に留める様子がない。

「私と君は、血の繋がりが無い。年の差婚なんて、世界にはありふれている。それに、私は、こうなる時を、首を長くして、ずっと待っていたんだ。誰にも、隣を譲る気はない」

難色を示していることに痺れを切らしたルシアンは、

含みのある言い方をした。

それから、ルシアンの顔がわたしの胸元に埋まる。

大きく息を吸っては吐いて、その熱が、じわりと肌に吸い付

く。

呼吸を繰り返すと、やがて谷間は汗で濡れたようにしっとりしていく。

「リリム、リリム……♡。私の、大切な……」

消えそうな声で、ブラジャーの留め具を外す。

支えを失った乳房は、左右に広がってこぼれる。

こぼれた乳房を両手で掬うと、柔らかく揉みしだいていく。

「ンツ……、うツ♡♡」

「出会った時はすごく、小さかったのに……♡♡、成長したね♡♡。おっぱい、大きくなって、厭らしい、女の身体つきに

なってる♡」

乳頭に視線が流れ、じっと見つめられている感覚が、乳房に吸い付く。

ちりちり、ぞわぞわした感覚に、背筋が硬直する。

初めての感覚に、むず痒くて、身じろぎをすると、厭らしく隆起した粒に、ルシアンの舌が添えられた。

「ッ……♡」

乳輪の境目を舌でくるくるなぞる動きをして、やがて乳首のくびれに舌がぴったり♡ハマる。

くりくり♡と変形するくらい強く上に押し付ける。

刺激が腰を伝い、足に走る。

漏れ出そうな変な声と、恥ずかしい感情を我慢したくて、膝を擦り合わせていると、気づいたルシアンの口角が上がる。

「ふふッ♡」

なにが嬉しいのだろう。薄く笑うと、乳首が口腔に飲まれる。

じゅるじゅる♡、わざとらしく音を立ててぬりぬり♡と舌で唾液を塗り付けていく。

蒸しタオルで包まれているような温かさと刺激が、腰に落ちる。

身体を洗う時や、着替えを手伝ってもらう時とは違う、淫らな行為に、それ用に身体が反応する。

「あ、ツ……♡、ンうツ……♡」

「おっぱい、弱いんだ♡」

「きゅ、ううツ♡」

ルシアンが唇が、乳房の薄い皮膚を引っ張る。果物を吸るみたい、吸引した。

「すべすべで、ぴくぴくしてて可愛いね♡」

吸引しては、唇を離して、また吸い上げては離して。とろとろの乳房の脂肪の感触を楽しむような動き。

くすぐったさと甘い痺れが首筋を駆ける。

「ルシアン、やだ……！」

感じたことのない刺激がくすぐったくて、恥ずかしくて、ルシアンの額を抑える。

けれど、刺激と興奮で思うように力が入らず、ルシアンはびくともしない。

逆に、上目遣いで、乳房を口腔に収め、乳輪をねろねろ♡と舌全体で舐め回しながら首を傾げた。

「なにが、いやなの……？」

止める気はない。けれど、わたしが嫌なことはしたくない。

相反するふたつの感情をこめて、ルシアンは問う。

「リリム。怒らないから、教えて。……私が、嫌い？」

「違う……」

「私と、えっちするの、嫌？ 大人になるの、嫌？」

「それは……」

不安げにゆれるルシアンの眼光に、言葉が詰まる。

ルシアンのことは好きだ。大好きだし、離れるなんて考えられない、大切な人。

でも、それは親愛であって、恋愛なのだろうか。

「じゃあ、想像してみて。私以外の、他の男……。そうだ

な、ユーガとは、したいと思う？」

ルシアンの言葉のまま、ユーガと抱き合う姿を想像する。

——想像ができない。

ユーガは、この村に引越してきた時から仲良くしてもらっていたし、遊んでもくれた。

山菜や薬草が取れる場所を教えてくれる親切な人。

恋愛に発展するなんて、考えられない。

「ユーガは友達、だから……。できない」

素直に気持ちを口にする。

口にしないと伝わらないこともあるから、私はひとつひとつ

気持ちを整理して、言葉にしていくな。

「じゃあ、私とは……？」

ルシアンは、目を細めてじっと待つ。

いつまでも、わたしの気持ちを吐ききるまで、待ってくれる。

否定しないという安心感が、口を軽くする。

「ルシアンは家族だから、本当はこういうことしちゃ駄目だ
って、わかってる」

「うん。君が、私を兄として、父として慕ってくれていたと
いうのは、理解しているよ」

でも、いつまでも父や、兄のような存在ではいられない。ルシアンは断じた。

それが、針として胸をちくりと刺した。もう、以前のように戻れない。そう、ルシアンが断言したからだ。

「リリムは、なにが不安なの？」

「いままでのルシアンが、隣からいなくなっちゃうような気がして……。それに、ルシアンが、わたしと結婚するって。：わたし、ルシアンみたいに、整った顔じゃないし、普通の子だから。ルシアンだけの女の子になったら、きっと、飽きられちゃう」

言っていて虚しくなって、涙が溢れ出る。

「だから、えっち、したくない……」

——知っている。

ルシアンは、モテる。

いつも、若い女の子が教会にお祈りをしに来ては、ルシアンに色目で見ていることも。ルシアンの恋人に、お嫁さんになりたい人が多いってことも。

その度に、いつかルシアンが取られてしまうのではないかという不安で、胸がぎゅーって締め付けられる気持ちでいっぱいだった。

だから、いつかは離れる覚悟を決めていた。

なのに、その決意を、ルシアンは覆そうとする。

女の子としてじゃなくて、家族なら、ずっと一緒にいられるから。

「リリム」

ルシアンは、不安で零れた涙を、舌で掬って、わたしごと胸の中に抱きしめる。

ルシアンの胸元が湿っていく。

神父服が汚れてしまうのに、それも厭わず、力強く抱きしめた。

「君が、いつまでも子供でいられないように、私もいつまでも君の親代わりを務めていられない。身体が成長するように、心もまた、変わっていくからだ」

「うん、わかってる」

「だから、一生、一緒にいるための契約で、約束をするのが、結婚なんだ。結婚したら、君は一生、私から離れられないし、私も、君から離れない。これからも、君の隣であり続けることは、変わらないよ」

言葉で、ルシアンが不安をほどいていく。

一生、一緒にいる。

あの日、両親を亡くした日の孤独をもう味わうことがない。

ルシアンを失う日がこないことに、わたしは心の底で安堵した。

ルシアンを肯定して、手を取れば、ずっと、ルシアンといられる。

蜘蛛の糸に絡めとられているみたいな、違和感はあったけれど、孤独じゃないという安心感が、ルシアンとの関係を押す勇氣になった。

言葉の代わりに、背に手を回すと、少しだけ盛り上がった肩甲骨を撫でる。

ルシアンの肩甲骨は、ちよつと変わっている。

肩甲骨のきわが、少し盛り上がっている。

まるで、生えていた羽を切られたような、不思議な出っ張り。

指で、そこをなぞると、ルシアンの息が詰まる。

「——リリム」

もう、阻む感情はない。

ルシアンの唇が、唇を塞ぐ。

ねろねろ♡とねちっこい舌が、歯列をなぞる。

唾液を口の中に塗り付けて、唾液を上書きしていく。

ルシアンのもので上書きされていると意識すると、脳みそが
とろとろに溶けて、思考がぼわんと、ぼんやりしていく。

心地よい熱に蕩けているような、感じ。

熱を受け入れていると、唇が、ゆっくりと離れていく。

「リリム。……結婚、しよ？」

掠れた声で、唐突にルシアンが言った。

今日の今日で。準備だつてないし、村の人にだって説明しな
いといけないのに。

「神父様はどうするの……？」

そもそも、結婚は教会に属する神父や修道女が執り行う決ま

りだ。

ルシアンの場合、神父ではあるものの、自分の結婚式は執り行えないだろうから、他の神父にお願いする必要があるだろう。

「別に、神父なんか呼ばなくても二人きりで行おうよ。教会でさ。神様や天使に見てもらえば、誓いなんていくらでも立てられる」

「でも、こういうのって、祝福して、欲しいし……」

「——じゃあ、こうしよう。今日は、二人きりで誓いを立てて、本当の結婚式は今度挙げよう。その時は、盛大に花火でも

あげてさ。祝ってもらおう。……今日、急に結婚式をしたら、村の人もびっくりしちゃうだろうし。徐々に、私たちの仲を知ってもらおうよ」

ルシアンは提案に、わたしは頷いた。

親娘のような関係の私たちが、成人の日を迎えてすぐに結婚を挙げたら、世間体もよくない。

わたしはともかく、ルシアンが、こういう時のためにわたしを育てていたのかと変な目で見られてしまう。

ルシアンが、みんなから悪く思われるのは、悲しい。

だから、ずっとここで暮らしていくにしろ、根回しは必要な

のだ。

徐々に周囲の誤解を解いていくのだろうと、ルシアンに決定に納得した。

ルシアンは柔らかな笑みを浮かべて、私の手を引く。

「じゃあ、早速だけど、教会の方、いこっか？」

「——え？　今から？」

今日するにしても、お風呂に入って、身を清めて、簡素だけでも綺麗な服を着てからだと思っていなければ。

ルシアンは、私の服がはだけているのも厭わずきよとんと首を傾げた。

「うん。だって、誓いを立てるんだから、このままの方が都合いいでしょう？」

ルシアンが思う誓いと、私が思い描いている誓いの認識が違う気がする。

認識のすり合わせをしようと口を開こうとすると、ルシアンは浮足立って先に寝室を出てしまう。

ルシアンの不思議な行動に、疑問しかないけれど、ルシアンにはルシアンの考えがあるのだろう。

ルシアンを信じて、服のボタンだけを急いで止めて、後を着いていった――。

.....。

「じゃあ、リリム、ここ座って」

教会に入ると、ルシアンは金色の髪を揺らして最前列の聖体席に座る。

ルシアンが指定した席は隣——ではなく、自分の膝の上を叩いた。

こんなにも座る席がいっぱいあるというのに、ルシアンの膝の上に座れだなんて。

祭壇にある一人の神様と三人の天使が取り巻く像——神像に見られながら、ルシアン言う通りに、膝の上に座る。

「足、開いて」

長いスカートを捲り上げて、太腿をさわさわしながら指示を出す。

足を開けば、パンツが見えてしまう。

後ろを振り向いて、何故？と首を傾げると、ルシアンは傾げ返す。

「誓いだよ？ 神様の前で、私が、リリムの処女を奪——ああ、いや。リリムが、私に処女を捧げたことを、神様に見てて

もらうんだ」

そんな、誓いの立て方なんて聞いたことがない。

予想外のことに、私は目を丸くさせて、表情でルシアンに問う。

でも、ルシアンは不思議そうにこちらを見つめるだけ。

これが、ルシアンなりの結婚の仕方なのだろうか。

証明の仕方なのだろうか。

私より、ルシアンの方が長く生きているのだから、私が知らない誓いの立て方もあるのだろう。

自分に言い聞かせて、無理矢理納得させた。

「ルシアンが、そういうなら……」

頷くと、ルシアンの視線がゆるりと柔らかくなる。

同時に、腕が膝の裏に差し込まれて、椅子の座面に足の裏をつくように指示をされた。

上を脱がされ、上裸にされて、まるだしの乳房を、神の面前に晒す。

「恥ずかしい……ッ♡」

無機物の神像の視線が痛い。生きているわけでもない。意思を持っているはずがないのに、第三者の視線に晒されているような恥ずかしさ。

二人きりの恥ずかしい行為を、見せつけているような背徳感から目をそらしたくて目を瞑っていると――。

シヨーツの縁に、ルシアンが指を引っかけて下にズリおろす。

「~~~~ッ♡」

厭らしい透明の糸が、ねとお♡、と当て布の部分から引いた。

割れ目に当たっていた部分は、濃いシミを作っていて、まるで漏らしたみたいだった。

こんなの、ルシアンに揶揄われちゃう。

顏色を伺うために、後ろに注意を向けるけれど、ルシアンは、それどころじゃなかったらしい。

「この体勢だと、見えないのが残念だなあ」

「ひ、うッ……！♡」

ルシアンは一点。私のおまんこだけを注視していた。

ルシアンの角度からは、臀部と、割れ目から飛び出ている小さな肉芽だけが見えている状態。

それを、残念そうに唇を尖らせて、膝裏から差し込んだ指の一本が、ねじ込まれる。

皮膚がひきつるような痛みと一緒に、膣に侵入する。

「狭い♡。指一本で、いっぱい、いっぱいだ♡♡」

「るし、あんツ♡♡、なんか、へんんツ……♡」

割れ目に張りついている光沢を指で掬っては、浅く膣に塗り付けて、内側に塗り込んでいく。

「へんじゃないよ♡。リリムが、早く雌の身体になれるように、頑張っているんだ。……だから、リリムも、頑張ろう？」

その動作を繰り返していくうちに、最初に入った時であった引きつったような痛みは徐々に緩和されていく。

膣の中に埋没した異物感に、奥歯を噛みしめて耐えていると、ルシアン of 熱い吐息が耳に吹きかかる。

「大丈夫、大丈夫♡♡」

言葉で安心感を植え付けながら、中を揺さぶる。

指一本分しか入らない小さな穴を拡張する動き。

指の関節を曲げては、中で溜まっている愛液を掻きだすような、淫らな動作。

「んあッ♡」

段々、指の動きは激しくなっていて、膣の窮屈感が増していく。

「リリム、感じる？ 今、指、増やしたんだよ？」

「あ、ああッ♡♡、や、あッ♡♡」

つぶ♡、つぶ♡、肉が擦れる音を立てながら、ルシアンは笑った。

暖かくて、低い声が、鼓膜を震わす。

下を見ると、確かに、一本だった指が、二本、出入りをして
いる。

厭らしく、透明な液体がぬらついている。

これが、私が汚しているのかと思うと、興奮する。

「ここも、弄ろうね♡♡」

手持ち無沙汰だったもう一本の腕が、太腿から取り払われ、
足の間に割り込んだ。

指の動きに合わせてふるふる揺れるだけだった肉芽を、指の間で挟み込む。

身体全体の筋肉が痙攣するほどのビク♡、とした刺激に包まれる。

「^ぐや、^ぐあ^ぐあ^ぐあッ♡♡」

濁音交じりの声が教会内に木霊する。

無様で、女性らしからぬ声なのに、ルシアンは指摘することなく、クリトリスを責め立てる。

「クリ、いじるの初めて?? また、リリムの初めて、もらっちゃったな♡♡」

指で挟み込んだクリをくちくち♡音を立ててつねる。

指の動きに合わせて、収縮する膣を掻きまわして、異物感と刺激で相殺していく。

クリトリスとおまんこが同時にビクビクってなって、何も考えられなくなる。

「リリム♡、リリムツ♡♡。はあ……♡♡。可愛い♡♡。リリムのクリちんぽ♡♡、こしこしする度に、大きくなってくの♡♡。もっと触ってほしいって、媚びてるの♡♡。必死なの♡♡、リリムと一緒にだね♡♡」

熱を持ったクリトリスが肥大化して、ルシアンの指の間から

はみ出ている。充血して、赤色だ。

グロいこれを、可愛いと表現するルシアンの美的センスがよくわからない。

でも、それすらどうでも良いくらい、気持ちいい♡♡。
もつと、してほしい。

甘く、腰を揺らすと孔の中に埋没した指が、孔を拡張するよう
に広げる。

「ほら、指ちんぽと一緒にいこっか？♡♡」

内側の凹凸を削いでいき、往復する動き。

おまんこは、指に絡みついてきゅう、きゅう締め上げる。

食いしばって、締め付けて、小刻みに震えた。

「おッ……♡、んおッ……♡♡」

なにか来るッ♡♡。

初めての感覚に戸惑いつつ、自然と下腹部に力を入れると、小さく積み上げられた塵が崩壊したみたいに下腹が痙攣を起こす。ぷつくりと腫れた膀胱が、弾ける。

「ンぎゅううううう……♡♡」

「——えッ??」

——まずい。

「あ、あ、あああ、あ……♡♡、らめえ……♡♡」

気付いた時には遅かった。

尿道から、透明な液体が勢いよく噴射して、弧を描き、カーペットの上を汚していく。

つんとした臭いはない。水のような、さらりとした質感の水が、シミを作った。

指を挿れられ、クリトリスをつねられ、深く絶頂に達してしまったのだと自覚するにはそう時間がかからなかった。

その自覚する間は、ただ虚しく。

——プシャアアア……♡♡、プシッ♡、プシッ♡、ちよろよろ……♡♡。

潮の吹く音が響いた。

ルシアンは、青色の瞳を丸くさせて、その最後までを見届ける。

潮が収まった後、尿道は達成感でヒク♡、ヒク♡、と甘く震える。ルシアンは蕩けた声で言った。

「……………お漏らし、しちゃったの？♡」

「ひッ、ひッ♡♡、ごめんなさいッ……………♡♡」

しゃくりをあげて、いい年にもなって漏らしてしまったことへの謝罪を繰り返す。

神聖な場所で粗相をしてしまったこと。

汚してしまったこと。

恥ずかしいことをしてしまったこと。

謝っても気が済む話ではない。

けれど、ルシアンは責め立てるのではなく、逆に喜んだ。

「いい子だね、リリム♡♡。初めてなのに、お潮まで噴いちやうなんて、才能あるよ？」

「なんの……？」

「私を喜ばせる才能♡♡。リリムはすごいなあ……♡♡」

ねちっこい声音で、ひくひく♡甘イキを繰り返す尿道の入り口を指の腹で撫でながら微笑む。

何度か、いい子、いい子した後、指を抜いて、指についた透明の水分の臭いを嗅いだ。

すんすん、とわざと鼻息を鳴らして。

汚い物を嗅ぐという衝撃と恥ずかしさで、言葉が詰まる。

「そんなの、才能とか、ないよッ……！　だって、神聖な場所で、お漏らしして、汚して……、こんな汚い子、神様だって、嫌だよ……」

「汚くないよ？　私、リリムのなら、お潮だって、おしっこだって、飲めるから♡♡。というか、今度飲ませて欲しいな？

♡♡」

ほら、美味しい♡、と小さく呟いて、指に付着したものを味わった。

本当に汚くないということを、行動としてアピールしているのだろうが、私にとっては抵抗しなかった。

「絶対やだあ……！」

ルシアンはごくりと息を呑む。

本気で飲みかねない熱量に、必死に首を横に振って拒否をする。

「じゃあ、いっぱいえっちして慣れたら、飲ませてね♡♡」
諦めるのではなく、先延ばしにされただけだった。

本気でするわけではない、と自分に言い聞かせて気持ちを落ち着かせる。

後ろのルシアンはくつくつと笑ったまま、いったばかりのおまんこの中に今度は指をねじ込み、ばらばらに開いて動かした。

にゆくにゆく♡音を立てて、媚肉が蠢く。

自発的に動いているのではなく、指が動いていて、付随して動いているように見えているに過ぎない。

やがて、きつかったおまんこは、指の大きさに慣れてきて、すんなり受け入れ始める。

「ほら、リリム、こうしているうちに、おまんこ、こんなに広がったよ♡♡、今、何本入っているでしょう？」

「に、にほん……？」

ルシアンは、にこお、と笑って、ねちっこい声で言った。

「ざんねん♡♡、正解は、四本でした♡♡」

クイズに不正解した罰ゲームと言わんばかりに、膝を持ち上げて、腰を高く……、神像の視線に合うように位置を調整した。

くちくち♡♡、ほじりながら、両手の指を中に入れて、左右にくば♡と広げる。

ピンクのポルチオと、神像の視線が合う。神像に見られているように恥ずかしい。

「ほら、神様に、処女膜がついている、綺麗なおまんこ見せてもらおうね♡♡。これが、今から私のおちんちんを受け入れるんだって、証明してもらわないと♡♡」

すう、微風が開かれた膣孔に侵入する。

風がポルチオに触れて、びくびく♡と身体が跳ねる。膝の関節が反射的にびくつく。

不安定な、ルシアンの裁量ひとつで下に落ちてしまいそうな体勢も相まって緊張感が走る。

「神様に、きちんと見てもらわないと。……誰が、誰のもので、誓いを立てるのか。一生離れられない契約で、約束で、誓約。女の子の初めてを奪った男が、一生の伴侶になる儀式を、神自身に、証明してもらわないと」

意図的なのか、尾骨のくぼみにルシアンのものがゴリツ♡と当たる。

柔らかいけど、芯のある硬さ。

中に石を詰め込んでいるのではないかってくらい、硬くて大きいそれに、喉がごくりと鳴った。

これが、今から、私の中に――。

茂みの中でしていたカップルが、気持ちよさそうに、発情期の獣同士の交尾のように上げていたそれが、私の中に、今から挿る。

呆けていると、ルシアンはわたしの足を降ろしてズボンをずり下げた。

すると、赤く隆起した、極太の肉棒がぶるん♡と音を立てて姿を現した。

——太い。わたしの手首ほどあるのではないかという凶悪な形をしている。

盛り上げられた熱が、ゆっくりと引いていく。

こんなの、入るわけがないという不安と恐怖が広がっていく。

でも、ルシアンは私が思っていることを見透かしていた。頭を撫でて、優しい言葉で緊張をほぐしていく。

「大丈夫だよ、リリム」

ルシアンの低くて心地よい声が教会に響いた。

「女の子の身体は、本来、赤ちゃんを産めるようにできているから、おまんこの穴は拡張できるんだよ」

「でも……」

「本当に痛かったら、止める。私が、リリムの嫌なことをし

たことがある？」

「……ない」

「じゃあ、私に、任せてくれる？ 無理は、絶対にしない」
静かに頷くと、開いた股の間に肉感がある質量が押し付けられる。

「優しく、してほしい」

「もちろん。……私の、私だけの、リリム」

幹が、陰唇を往復する。

既に、鈴口から出ていた我慢汁の湿り気も相まって、滑らかに割れた肉を滑った。

クリトリスが、幹に擦ると、奥がビクビク♡、震えて、愛液がとろとろ♡膣壁を伝って零れ落ちる。

「いっぱい、おまんこ汁つけて♡」

「んッ……♡」

おちんぽから与えられる刺激に、興奮して心臓がバクバクとうるさい。

さらに、光沢塗れの幹が、ステンドグラスの窓から零れる月明りに当てられると、淫猥で淡い光を放った。

わたしのもので汚れていると思うと、緊張が最高潮に達する。

いけないことをしているようで、妙な達成感で満たされて頭がぼうつとした時だった。

ルシアンの切っ先が、孔の中心にぴたり♡とくつついた。膣にあてられた硬い質量に現実引き戻される。

——少し、待って欲しい。

心の準備がまだだと告げる前に、腰に添えられたルシアンの手の力が込められた。

「ほら、ゆっくり♡♡、ゆっくり……♡、挿れるね？」

ルシアンによって掴まれた腰が、導かれるようにゆっくり真下に落ちていく。